

## 「市河文書」註釈稿 (一)

牛 山 佳 幸

はしがき

「市河文書」は北信濃の志久見郷（今日の下水内郡栄村から下高井郡野沢温泉村にかけての地に比定される）に本拠を置いた武士、市河氏に伝来した平安末期から戦国期に至る中野・市河両氏に関わる文書である。市河氏は武田氏滅亡後に上杉景勝に属したため、のちその国替えに従って信濃を去り、出羽米沢に移った。しかし、明治維新後は「市河文書」の大部分は子孫の手を離れ、山形県酒田市の本間美術館の所蔵に帰して現在に至っている。その数は約一五〇通にのぼり、一括して国の重要文化財の指定を受けている。

中野氏および市河氏は終始、辺境の一小領主の地位に甘んじたが、文書の内容は単に地方武士の動向を示すものにとどまらず、中世における女性の所領相続や訴訟手続の実態、あるいは南北朝期の軍事関係文書の様式・形態を知る上での好箇の史料として、これまでも注目されてはきた。しかし、この文書群の内容的特徴はそれだけではない。木曾義仲や阿野全成といった他に類例のない発給者の下文、比企氏事件の裏面史を語るもの、いわゆる「日付のない訴陳状」の例、春近領という数ヶ国にまたがる大所領に関わるもの、あるいは中先代の乱の戦況が伝わってくる文書等々……、およそ中世の政治

史・経済史・社会史等の研究を行なう者にとって、まことに興味尽きない、そして実に多彩な問題点やテーマを包摂するものであることである。にもかかわらず、従来必らずしも十分に利用されてきたとは言いがたいのは、若干の偽文書や疑義を有する文書が含まれているとみなされて、十全な検討を経ることなく敬遠される傾向にあったという事情にも一因があるように思う。本稿は、本文書が今後幅広く活用され、かつ地域に住む人々にとっても身近なものになることを願い、そのための基礎的作業として、一通一通の内容を検討しつつ、釈文および語釈を施すことを意図したものである。

本文書はつとに『信濃史料』や『新編信濃史料叢書』をはじめ、関係する郡誌・市町村誌等に翻刻されてはいるが、本稿を草するにあたり、あらためて東京大学史料編纂所に架蔵される原本写真に依拠することとした。この写真の利用に関しては、元同所員で現早稲田大学教授の瀬野精一郎氏のお手を煩わすと共に、原本所蔵者である本間美術館の佐藤三郎館長の許可を得た。両氏の御好意に厚く感謝の意を表するものである。

なお、この作業は信州大学教育学部の日本史学演習で、数年間続けていく講読の成果の一部であることを付記しておく。

## (1) 某下文

(端裏書)

「これへいけの御下文」  
(花押)

下 中野郷公文定使所

定遣西條下司職事

侍 助弘

右以人、可令執行彼郷務状、所仰如件、敢不違失、以下  
(一七〇)

嘉應二年二月七日

(花押)

〈釈文〉

下す 中野郷公文定使の所

定め遣す西条下司職の事

右の人を以て、彼の郷務を執行せしむべきの状、仰する所件の如し、敢えて違失すべからざれ、以て下す

嘉應二年二月七日

(花押)

〈語註〉

中野郷 信濃国高井郡のうち、千曲川の支流、夜間瀬（夜交）川扇状地の末端に発達した郷。現在の長野県中野市内。『和名類聚鈔』に所見されない（ちなみに同書流布本には、高井郡内の郷として穂科・小内・稲向・日野・神戸の五郷が記載される）、いわゆる「中世的郷」の一つである。『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）二

月廿一日条に、尾藤太知宣が先祖藤原秀郷から代々伝領していた「信濃国中野御牧」を紀伊国田中・池田両荘と共に、源頼朝に安堵を願ひ出ている記事があるが、中野牧は同書文治二年三月十二日条所引の関東御知行国々内乃貢未済荘々注文に所載される左馬寮領信濃二十八牧のうちに見えないので、平安後期までに牧としての実態を失い、かわってその中から開発が進められ、郷として発展してきたのが当郷であったと考えられている。

西条 「西条」の地名は中野市の南部に大字として現存。「東条」も当然あったはずであるが、市河文書の中には所見されず、地名として残存していない。「条」は荘園・公領の所領単位もしくは行政単位であるが、その起源は開発が盛んに行なわれた平安後期にあったらしいことが、この文書からも推察される。「条」地名は長野県内（とくに北信）には数多く知られ、例えば東条・西条はかつての水内郡若槻荘（現長野市若槻）・埴科郡英田荘（現長野市松代）・筑摩郡塩尻郷（現塩尻市）などの故地に、また水内郡常岩牧（現飯山市常郷）の故地に南条・北条、埴科郡坂城郷（現坂城町）の故地に南条・中条などの地名が現存している。

公文 くもん。律令制下では公文書の総称。次第に「公文書」を扱う者への意に転化し、さらに荘園・公領の現地役職名の一つとして定着。ここでは後者の意。

定使 訓み方は『易林節用集』などによれば「じょうづかい」。荘園・公領内の下級役人の一つで、主として在京領主と現地との間の伝達・連絡や年貢の徴収などを任務としたらしい。

下司 げし。荘園の現地で荘務を統轄する荘官。開発領主や地主が

所領を中央権門に寄進することによって、領主から任じられるのがふつうだが、中野郷の場合のように中央から派遣されることもあった。在地領主の代表的存在で、平安後期にはほとんど武士化しており、鎌倉幕府成立後に地頭・御家人となったものの大部分はこの階層に属する。なお、中野郷は一応公領であるから「郷司」と呼ばれるはずであるが、ここで「下司」となっているのは同郷が事実上、中央権力者の私領と化していたことと無縁ではないだろう。

侍 「さぶらふ」(候ふ・侍ふ)の連用形「さぶらひ」が語源で当初は宿直・近習を意味する語であったが、平安初期頃から凡下(郎等・雑人・下人・所従などの総称)に対応する一つの社会的身分(いわゆる武士)を示す語として用いられるようになった。その属性として、犯罪の嫌疑をかけられた時に拷問を免がれるなどの「有官位者」と同待遇を与えられていた点や、所領を知行する資格を有し名字を名乗ることができた点などがあつたとされる。田中稔「侍・凡下考」(『史林』五九ノ四)参照。

助弘 藤原助弘。この人物の出自については三号文書の語註を参照。

違失 失敗、過失。「不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>違失<sub>一</sub>」はここでは「ぬかりなく下司としての職務に励みなさい」といったほどの意。

#### 〈補註〉

花押の主 本文書の花押の主、もしくは差出人の実名は不明。嘉応二年(一一七〇)当時は高倉天皇の治政下で、平氏の全盛期であつたから、端裏書に「これへいけの御下文」とするのをもっと

もだが、今のところ、平家一門の中にこの花押の主は確認されていない。中野郷が公領である点を考慮すれば、やはり任命者は国司ないしは知行国主とすべきか。当時の信濃国の知行国主は藤原忠雅、信濃守は藤原隆雅である(飯田悠紀子「知行国主・国司一覽」『中世史ハンドブック』)

#### 〈翻刻〉

『信濃史料』第三卷三三〇四頁、『編信濃史料叢書』第三卷三頁、『平安遺文』三五一号

(2) 木曾義仲下文

(端裏書)

これへきそとの、御下文

(中野能成カ)

(花押)

下 資弘所知等

可<sub>三</sub>早如<sub>レ</sub>舊令<sub>ニ</sub>安堵<sub>一</sub>事

右、件所、如<sub>レ</sub>元可<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>沙汰<sub>一</sub>之状、如<sub>レ</sub>件

(一八〇) 治承四年十一月十三日

源 (花押)

(付箋)

「きそとの、御下文 あんとの御はん」

#### 〈釈文〉

下す 資弘の所知等

早く旧の如く安堵せしむべきの事

右、件の所、元の如く沙汰致すべきの状、件の如し

(一八〇) 治承四年十一月十三日

源（花押）

〈語註〉

資弘 助弘に同じ。

安堵 あんど。従来から有する所有権・知行権・領有権などを確認、

あるいは承認すること。鎌倉時代には幕府の御家人に与える御恩

として行なわれ、封建的主従関係を形成する主要な契機となった。

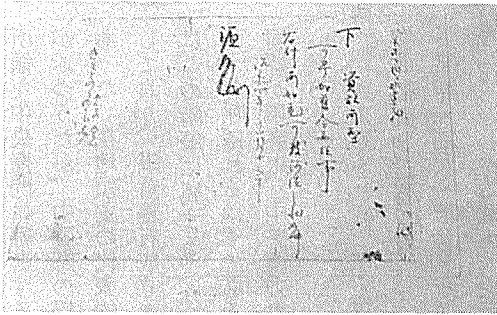
本文書により、木曾義仲にその先駆形態のあったことがわかる。

所知 「所知」で「所領」と同義だが、宛所として用いられる例は

稀。実際には所領内の住人を指称しているとみられる。なお、

『信濃史料』や『新編信濃史料叢書』では「所知等」を「所輩」と

読んでいるが従いがたい。



写真(A) 治承四年十一月十三日木曾義仲下文  
(市河文書 山形県本間美術館所蔵)

源（花押） 写真(A)参照。中

野能成（後出）の花押のあ

る端裏書に「きそとのゝ御

はん」と見えるが、木曾義

仲の花押を有する確実な文

書は他に一通も現存しない

ため、確認するすべがない。

しかし、義仲は治承四年

（一一八〇）九月に信濃で

挙兵したあと、十一月には

上野に攻め入るほどの勢い

を示しているので、中野郷

西条の領主助弘が義仲に所領安堵を願い出るようなことがあったとしても（もともと、助弘が義仲軍に従軍したかどうかは不明だが）、矛盾はしない。なお、補註参照。

〈補註〉

木曾義仲の発給文書 木曾義仲が信濃一円を支配下に置き、さらに

北陸道諸国に進出する過程で、在地領主層の求めに応じて安堵の

下文などを多数発給していたらしいことは、例えば次のような事

例からうかがうことができる。

⑦蓬左文庫所蔵金沢文庫本齊民要術卷十裏文書の文永八年（一

二七一）五月日笠原信親所帯證文目録（『鎌倉遺文』一〇八三六

号）に「木曾殿御下文 治承五年四月十五日」とある。

①尊経閣文庫所蔵文書の弘長二年（一二六二）三月一日関東下

知状（『鎌倉遺文』八七七五号）は、円宗寺領越中国石黒莊弘瀬

郷をめぐる雑掌幸円と地頭藤原定朝らとの相論を裁許したものだ

が、この中に「如<sub>レ</sub>定朝等所進留守所治承五年八月・木曾左馬頭同六年二月下文者、以<sub>レ</sub>定直<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>弘瀬村下司職<sub>一</sub>云」と見え

る。

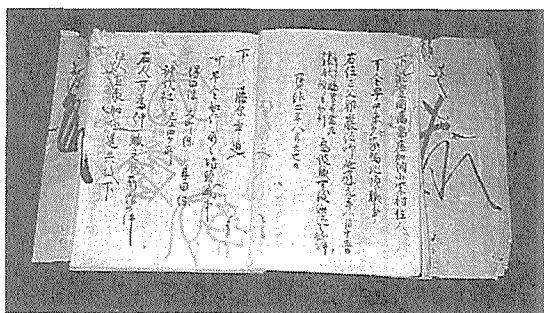
②高山寺文書の元暦元年（一一八四）四月日後白河院庁下文案

（『平安遺文』四一六六号）は、蓮華王院領但馬国温泉莊莊官ら

に地頭職を停廃し、その身を追却すべきことを命じたものだが、

その中に「停<sub>レ</sub>止季広狼藉、可<sub>レ</sub>糺<sub>二</sub>返上件物等<sub>一</sub>之由、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>下寺家并義仲下文、季広一切不<sub>レ</sub>承<sub>二</sub>引之<sub>一</sub>……」と見える。

なお、近年、石川県立図書館蔵の『雑録追加』（加賀前田家



写真(B) 治承五年十一月二十四日木曾義仲下文写  
(『雑録追加』巻七 石川県立図書館所蔵)

いるという、やや特異な筆写の形態になっているが(写真(B)参照)、復元すれば次のようなものである。

下 藤原章通

可<sub>レ</sub>早令<sub>ニ</sub>知行所々地頭職<sub>ニ</sub>事

得田保 大町保 甘田保

神代社 己上四ヶ所

右人、可<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>件職<sub>ニ</sub>之状、所<sub>レ</sub>仰如<sub>ニ</sub>件、住人宜<sub>ニ</sub>承知<sub>ニ</sub>、勿<sub>レ</sub>違失<sub>ニ</sub>、故下

治承五年十一月廿四日

源(花押影)

藤原章通は能登国羽咋郡得田保の開発領主で、得田氏の祖とさ

に仕えた軍学者有沢永貞の編、尊経閣文庫旧蔵)巻七に木曾義仲下文の写しが見出され、東四柳史明氏によって紹介された(「木曾義仲と能登武士」/治承五年十一月二十四日義仲下文の検討)、『加能地域史』一〇号。また、同氏著『半島国の中世史』第一章にこの文書についての言及がある)。この文書は花押影が冊子の折り目の部分に別紙で貼り付けられて

れる人物である。この文書について東四柳氏は、書札様の上からとくに問題がないこと、花押影が市河文書のものに酷似していること、義仲が家人組織化の過程で与党の武士を地頭職に補任していたとみられる事例が他にあること(前掲②の史料や、仁和寺文書寿永二年九月廿七日後白河院庁下文案所見の越前国河和田荘の検非違使友実の事例)などの点から、この文書は内容的には信頼に足るものと判断されている。義仲は同年七月の横田河原合戦で勝利をおさめたあと、北陸道に進出し、九月には平通盛を越前で敗退させているから、十一月の時点では北陸道全域がほぼ義仲軍の制圧下に入っていたと推定され、时期的にも問題がないかみえる。しかし、書札様の点ではどうか。書き止め文言などは確かに整っているが、地頭職のような所職を補任する場合には、宛所は荘郷名もしくはその住人とされるのが通例(五号文書の註を参照)で、当事者に直接下される形式をとったものは、この前後の時期にはほとんど例がない(管見では、小山朝政に宛てた久米春男氏所蔵文書建久三年九月十二日源頼朝下文のような、特異な事例があるのみである)。そもそも、四ヶ所もの荘郷の地頭職を一括して補任するというのも極めて特異な形式だろう。得田章通が義仲から所領安堵を受けた事実があったとしても、この文書自体は鎌倉時代以降、何らかの意図のもとに作成されたものと考ええるべきではなからうか。中世の得田氏の所領が得田保のみであったらしいことは、その辺の事情を推察する手がかりになるように思われる。

しかし、いずれにしても影写された花押が市河文書の本号文書

のそれと酷似している（ただし、縦の線が一本多いという致命的な差違があるが）事実、この文書が作成された当時、義仲の発給文書が他にも実見できる状況にあったことをうかがわせる点で、興味深い。そのことは同時に、市河文書中の本号文書の花押が、まさしく木曾義仲のそれであったことを示唆するものと言えるのではなからうか。

# △翻刻▽

『信濃史料』第三卷六五～六頁、『編信濃史料叢書』第三卷三頁、『平安遺文』三九三七号

## (3) 阿野全成下文

〔付箋〕「あぐせんしとの御はう  
よりともの御おとのか」  
〔端裏書〕「これハあぐせんし殿の御下文  
〔中野能成〕  
〔花押〕」

下 中野郷内西条

定遣下司職事

藤原助弘

右人以、為下司之職、可令執行郷内雜事之状如件、且有限鎌倉殿之御下文、敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違失、故下

〔一八三〕  
壽永二年十二月七日

〔阿野全成カ〕  
〔花押〕

# △釈文▽

下す 中野郷内西条

定め遣わす下司職の事

藤原助弘

右の人を以て、下司の職として、郷内雜事を執行せしむべきの状、件の如し、かつがつ限りある鎌倉殿の御下文に、敢えて違失すべからざれ、故に下す。

壽永二年十二月七日

〔花押〕

# △語註▽

藤原助弘 ここで初めて、助弘（資弘）が藤原姓であったことがわかる。助弘の名は『尊卑分脈』等の現存する藤原氏関係系図には所見がない。中野郷と関係の深い中野御牧が秀郷流藤原氏の所領であったことや、『山内首藤家文書』所収の同氏系図などによると、同じく秀郷流藤原氏に平安末期頃、資清—資通—通広の流れがあることから、郷道哲章氏はこの系譜につながる人物であろうと推定されている（『中野郷と中野一族—「市河文書」の研究三—』『信濃』四二ノ一一）。また同氏によれば、中野郷西条を伝領した能成とこの助弘は、名乗りの点などから親子関係とはみなしがたいという。この点については六号文書の註も参照。

有限 かぎりある。「一定の」という原義から転じて、「おそれ多い」「もったいない」「大切な」などの意で用いられることが多い。故下 ことさらにくだす。公式様文様文書の移の書き止めに「故移」とあり、この「故」もその系譜を引く用例らしいが、もってくだす。「以下」とはとくに区別して用いられてはいないようである。

鎌倉殿 源頼朝のこと。この文言があることにより、本文書が頼朝の意を受けて出されたことがわかり、あるいは副状にあたるものではないかと思われる。

あくせんし 悪禅師。「悪」は悪源太義平、悪七兵衛（平景清）の類と同じように、剛気で荒々しい気性の持ち主の意。「禅師」には種々の用例があるが、ここでは貴種出身の僧侶の意か。この時期に鎌倉政権に連なる人物で「悪禅師」に比定できるのは、付箋の筆者も指摘するように頼朝の弟で、醍醐禅師と通称された阿野全成しかない。全成の文書と伝えられるものは本号と次号の市河文書中の二通のみなので、花押については確証がないが、中野能成の花押を有する端裏書に「あくせんし殿」とある以上、ここでは本文書を一応、全成を差出人とする文書としておく。全成については補註で言及。

# 〈補註〉

阿野全成の生涯 全成（一一五三～一二〇三）は幼名今若。源義朝の六男で、母は義経らと同じ常盤。平治の乱で義朝が敗死後、醍醐寺に入寺させられて出家した。治承四年（一一八〇）八月、兄頼朝の挙兵を知って箱根に至ったが、渋谷重国らに保護され、同年十月下総国鷲沼（現千葉県習志野市）の宿に、石橋山合戦で敗北後の頼朝を訪れて感激させたと『吾妻鏡』にある（以下、特記なき場合は『吾妻鏡』が典拠）。この後、頼朝の計いで武蔵国長尾寺に住持し、たびたび戦勝のための祈禱を行っている。長尾寺は正しくは長尾山威光寺といい、川崎市多摩区長尾にある天台宗

妙楽寺がその後身であることが、近年同寺本尊薬師如来像の脇侍、日光菩薩像胎内銘から判明した（三輪修三『多摩川―境界の風景―』などによる）。この間、北条時政の女、阿波局を娶り、子としては時元（『尊卑分脈』では隆元に作る）・頼全・道暁など数子が知られる。また、所領としては名字の地である駿河国阿野（安野とも）郡があった。これは律令制下には存在しなかった郡名で、郷と同義に用いられたらしく、室町期の阿野荘に当たるといわれる。

本来の駿河郡に含まれ、現在の静岡県沼津市から富士市にかけての地域に比定されている（『角川日本地名大辞典22静岡県』）。建仁三年（一二〇三）五月、全成は謀叛の噂により武田信光に捕えられ、常陸国に配流されたあと、同年六月八田知家によって下野国で誅せられた。つづいて子の頼全も京都で殺害された。謀叛の真偽は不明だが、妻の阿波局が千幡（実朝）の乳母であった関係から、頼家を中心とする反北条氏側の陰謀の可能性もあり、三ヶ月後の比企氏事件の伏線となった事件とみることもできる。

全成の一子時元がこの事件のあとも本領を安堵されて、『阿野冠者』と呼ばれていたことも、全成が妻の父である北条時政寄りの立場にあったと考えれば納得がいく。名乗りの一字に「時」を用いていることも、北条氏との密接さを示す証左だろう。しかし、その時元も承久元年（一二一九）二月に領内に城郭を構えて兵を挙げた。この時、鎌倉には「申賜 宣旨、可管領東國之由、相企」と報じられている。同年二月二十二日、鎌倉から差し向けられた金窪行親以下の御家人により、安野次郎、同三郎入道などの伴類は悉く敗北し、時元も翌日自害した。この事件の真相も不

明の部分が多いが、朝廷側から扇動されたとすれば、承久の乱の前哨戦としての意味をもっていたと評することもできる。いずれにしても、三代將軍実朝がこの年の正月二十七日に暗殺されたから、源氏の嫡流で主だった者は、この事件によりほとんど滅び去ったということになる。

# 〈翻刻〉

『信濃史料』第三卷二八九～九〇頁、『新編信濃史料叢書』第三卷三頁、『平安遺文』四二二〇号

## (4) 阿野全成下文

（端裏書）  
「これへあくせんし殿の御下文  
（中野能成）  
（花押）」

下 信濃國志久見山

定<sub>ニ</sub>補地主職<sub>ニ</sub>事

藤原助廣

右人以、為<sub>（マカ）</sub>地主職、可<sub>レ</sub>致沙汰之状、所<sub>レ</sub>仰如<sub>レ</sub>件、敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違

失、以下、

（一八四）  
壽永三年三月六日

（阿野全成カ）  
（花押）

## 〈釈文〉

下す 信濃國志久見山

定め補す地主職の事

藤原助廣

右の人を以って、地主職として、沙汰致すべきの状、仰する所件の如し、敢えて違失すべからざれ、以って下す

壽永三年三月六日

（花押）

## 〈語註〉

志久見山 のちには志久見郷と見えるもの。従って、単なる山の名称ではなく、この場合の「山」は莊・郷・保・浦などと同格の、所領単位の一つである。すなわち、志久見郷はもと山を主たる対象とした所領であったのである。領域はほぼ現在の下高井郡野沢温泉村と下水内郡栄村に当たる。「山」所領は、信濃国では、他に具体例を確認できないが、阿波国に多かったことが知られている（補註参照）。

地主 ここでは莊園公領制下における私的土地所有者のことだが、その実態は時代的変遷により、ほぼ二つに分類できるようである。①は十～十一世紀に名の年貢請負人であった田堵が、占有権を世襲化することによって私有権を確立し、地主と称されたもの。この場合、地主の権利は作手であり、加地子得分を得たに過ぎない。②について、十一世紀中頃から山野を開発し、土地を私有する開発領主が出現すると、これも地主と呼ばれることが多かった。開発領主は国司などの介入を排除するため、中央権門勢家に私領を寄進し、莊園領主から下司職に補任されることによって、実質的な土地所有権を確保する方策をとった。この例としてよく知られるのは、源（新田）義重を上野国新田莊下司職に補任した、正木



文書の保元二年（一一五七）三月八日左衛門督家政所下文（『平安遺文』二八七五号）に「依為地主補任下司職」とあるものである。こうして、地主職は下司職とほぼ同一の権限内容を指すに至るが、本文書の地主職もこの段階の用例に該当するものと言うことができる。なお、以上は主として『国史大辞典』第七巻、「地主職」の項（棚橋光男氏執筆）に依るところが多い。

助広 資弘・助弘に同じ

### 〈補註〉

阿波国の山所領 福家清司「阿波国中世所領研究ノート」（『四国中世史研究』創刊号）によると、阿波国の中世的所領の中で特徴的なのが「山」所領で、史料上に所見されるものだけでも、種野山（麻殖郡）・大栗山（名西郡）など八ヶ所に及んでいる。その属性としては、平安時代末期までは確実に遡りうる所領で、本来はいずれも国衙領であったと考えられる点などがある。また、「山」所領の形成される前提として、商品経済の一定の進展を背景とする山野の利益の活発化、具体的には国衙が林業生産を掌握する必要性のあったことが指摘されている。志久見山（郷）の場合も、平安末期に成立した国衙領であった点は共通するが、材木を年貢として出していたことを示す史料はのちのちまで見当たらない。むしろ、鷹の飼育がそこでの重要な生業の一つであったらしいことが、一六号文書などからわかる。

### 〈翻刻〉

『信濃史料』第三卷三五七～八頁、『新編信濃史料叢書』第三卷四頁、『平安遺文』四一四三号

### (5) 將軍家源頼朝政所下文

（付箋）  
「こたしやうとの、御下文」

將軍家政所下 信濃國高井郡内中野西条并（松）檜山住人

補任地頭職事

藤原助廣

右人補任彼職之狀、所仰如件、住人宜承知、勿違失、以下

建久三年十二月十日案主

令民部少丞藤原（花押） 知家事中原（花押）

別當前因幡守中原朝臣（花押）

### 〈釈文〉

將軍家政所下す 信濃國高井郡内中野西条并檜山住人

補任する地頭職の事

藤原助廣

右の人を彼の職に補任するの狀、仰する所件の如し、住人宜しく承知すべし、違失するなかれ、以って下す、

建久三年十二月十日案主

令民部少丞藤原（花押） 知家事中原（花押）

別當前因幡守中原朝臣（花押）

### 〈語註〉

政所 令制では親王四品以上および諸王・諸臣職事三位以上（公卿）の者の家に置かれた家政機関。侍所・問注所と並ぶ鎌倉幕府の重要な政務機関となる政所も、こうした公家の制度に範をとったもので、文治元年（一一八五）源頼朝が従二位に叙せられることによって、前年設置された公文所が正式に政所と呼ばれるようになった。建久元年（一一九〇）権大納言・右近衛大将に補任されてから（両職はすぐに辞退）は、公卿にならって「前右大將家政所」と称し、ついで同年征夷大將軍に任ぜられると、「將軍家政所」と称した。このあと同六年の上洛の際に征夷大將軍を辞退したらしく、同七年からは「前右大將家政所」の称に復している。櫛山 しくみやま。志久見山に同じ。

住人 中野西条および志久見山の住人。住人とは武士・農民を問わず、領内の居住者すべてを指す語と思われる。形式上は住人が宛所となっているが、実質的には地頭藤原助広に対するものであることは、本文書が市河文書の中に伝来していることから明らかにである。鎌倉時代の地頭職補任状は、一般にこのように在地住民に宛て下される形式をとっているが、これは彼らの前で実際に読み上げられた（つまり、口頭で伝達された）ことを示唆するものであるうか。

別当・令・知家事・案主 いずれも政所職員の職名  
 こと大しやう 故大將。「大將」とは征夷大將軍の略ではなく、建久元年に補任された右近衛大將のことである。

# 〈翻刻〉

『大日本史料』第四編之四―二〇七―八頁、『信濃史料』第三卷四四〇―一頁、『新編信濃史料叢書』第三卷四頁、『鎌倉遺文』六四五号、黒川高明『源頼朝文書の研究』史料編 五三号

## (6) 北条時政安堵状

〔付箋〕  
 「とうたうみのかうのとつ、即下文」

信濃國住人中野五郎、可令安堵本所之状、如件

建仁三年九月四日 遠江守（花押）

## （釈文）

信濃國住人中野五郎、本所を安堵せしむべきの状、件の如し、

建仁三年九月四日 遠江守（花押）

## 〈語註〉

中野五郎 藤原能成のこと。助広の所領を継承したが、名乗りの点などから助広と親子関係にはなく、秀郷流藤原氏の佐藤氏の出で、助広の娘婿もしくは養子との説も提起されている（郷道哲章氏の前掲論文「中野郷と中野一族」参照）。能成については、文治五年（一一八九）の頼朝の奥州追討に従軍したのを初見として、『吾妻鏡』にしばしば見え、頼朝の二度の上洛にも従い、その死後は頼家の近衆として仕えたことが知られる。同書建仁三年九月四日条によると、能成は比企能員の与党との理由で時政に拘禁されたとあり、同一の日付にもかかわらず本文書の内容とは食い違いため、比企氏事件の真相やそこの能成の役割をめぐって

は、偽文書論も含めてこれまで種々議論がある。この点については補註参照。

本所 ここでは本領の意。

遠江守 北条時政。時政が従五位下遠江守に任官したのは正治二年（一二〇〇）四月。本文書に時政の単署があるのは、建仁三年（一二一三）九月に比企能員を誘殺すると共に、將軍頼家を廃して実朝を跡継ぎに据え、自らは政所別当として幕府の実権を掌握したことを象徴している。同年九月以降、諸国御家人の所領安堵を内容とした、時政単署による下文が多数発給されて伝来しているが、本号以下四通の文書もこれに該当する。

#### △補註△

比企氏事件と中野能成の立場 比企氏事件とは、建仁三年（一二一三）九月二日、幕府の重臣比企能員が北条時政の名越亭で誘殺され、あわせて頼家の子一幡と比企一族が滅ぼされた事件。直接の契機は將軍頼家が危篤に陥った同年八月、時政が関東二十八ヶ国の地頭職と日本国総守護職を一幡に、関西三十八ヶ国の地頭職を頼家の弟千幡（実朝）に譲与するという案を出したことに對して、不満を持った能員が回復後の頼家と時政追討の謀議をしたことにあった（『吾妻鏡』）。しかし、そこに至る背景には、能員が頼家の乳母夫で、かつ娘の若狭局を頼家の妻として一幡を生んでいることから、外戚としての権勢が北条氏を凌ぐまでになって、それに対する時政の危機感が増大しつつあったという事情がある。この事件のあと、頼家は將軍を廃され、伊豆修禪寺に幽閉された。

ところで、『吾妻鏡』九月四日条には、この事件の関係者の処罰記事が「被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>禁小笠原弥太郎・中野五郎・細野兵衛尉等<sub>一</sub>、比輩侍<sub>二</sub>外祖之威<sub>一</sub>、日来、与<sub>二</sub>能員<sub>一</sub>成<sub>二</sub>骨肉之昵<sub>一</sub>、去二日合戦之際、相伴廷尉子息等<sub>二</sub>之故也、嶋津左衛門尉忠久、被<sub>レ</sub>収<sub>二</sub>公大隅薩摩日向等国守護職<sub>一</sub>、是又依<sub>二</sub>能員縁坐<sub>一</sub>也」と見える。小笠原長経・中野能成・細野兵衛尉の三人は、能員の子息と共に二日の合戦で能員と行動を共にしたという理由で拘禁されたというのである（ちなみに、島津忠久については、母親の丹後内侍が能員の義姉であったことが『吉見系図』によって知られるので、そのための連坐らしい）。この能成への処罰が市河文書の本号文書の内容、つまり所領安堵とは相容れないというので、石井進氏によってスパイ説が出された（中央公論社版『日本の歴史7鎌倉幕府』）。これについては湯本軍一「比企事件と中野五郎能成」（『高井』創刊号）による批判的な見解があるが、さらに近年、郷道哲章氏により偽文書説も唱えられるに至った（『長野県史通史編』第二巻、第三章第三節、および同氏「市河文書の研究——平安末・鎌倉期の花押とその周辺」『信濃』三九ノ一一）。郷道氏によれば、本号文書と次号の建仁三年九月廿三日の関東下知状の二通の花押が、他の時政文書のそれと比較して筆の運びに相違があり、かつ、この二通の文書を除外すれば、残りの二通の下知状の内容は『吾妻鏡』の記事と矛盾がなくなるというのである。しかし、偽文書を作成するにはそれだけの効用や理由があったはずだが、この二通を敢えて偽作するだけの意義は必ずしも見出しがたい。また、時政の花押は他の残存例からすると、年によってかなり形状に変化のあること

や、市河文書中には花押まで影写したとみられる後世の写しの文書が何点か認められる（実は後述のように、七号文書もその可能性が高い）ことから、花押の点のみから安易に偽文書とみなすことは躊躇される。

それよりも、四通の時政発給文書は能成が時政に内通したという立場に立てば、いずれもすっきり解釈できる内容であることに注意したい。まず本号文書だが、これは以下の二通とは異なっており、將軍の仰せを取りついだ形にはなっておらず（つまり関東下知状ではなく）、私的な文書というべきであり、それも緊急を要して出されたメモ的な文面である。そのことは、料紙が通常の半分の大きさという異例さからもうかがわれる。すなわち、能成は能員の子息らと共に頼家の側近に仕えていた以上、公的には断罪を免れないが、時政としては北条氏側に内々加担してくれた恩義に報いようとする意志（これは次号文書の内容と考え合わせると、結局は生活の糧として、旧領からの得分取得だけを認めることに落ちついたようである）を伝える必要があり、それが本文書ではなかったかと思われるのである。『吾妻鏡』の記事（おそらく、これも何らかの文書が典拠と思われる）と同一の日付であることの意義はここにある。問題は次の七号文書だが、郷道氏はこれを「志久見郷地頭職を安堵した」と考えている。しかし、あとの語註でも述べているように、この内容は「能員の非法に加った以上、本来の地頭の権限を安堵することはできないが、地頭職に伴う収入だけは取得することは許してやろう。従って安堵されたのと同じ気持ちで將軍に忠を尽せ」と言っている。これは將軍

の仰せを受けた関東下知状であり、当然のことながら、公的には連坐を免れないことが明記されているのである。能成が正式に志久見郷の地頭職を還補されるのは、十一号文書の貞応三年十一月十一日関東下知状だが、これと七号文書とは性格が異なり、相互に矛盾するものではないと言えよう。ちなみに、八、九号文書は中野郷内の屋敷や名田・内作の一部を返還したもののだが、これも中野郷西条地頭職の全面的還付を意味するものではない。能成はおそらく、この間に配流もしくは蟄居を余儀なくされていたのではなかろうか。『吾妻鏡』に能成のことが貞応元年（一二二二）十二月まで所見がないのも、そのことを反映しているようである。

なお、京都側の史料である『明月記』や『猪俣関白記』の九月七日条によると、すでに九月一日に幕府が重病の頼家が没したと朝廷に報告したとあり、その時の争いで一幡と比企氏が滅亡したという風聞も載せられている。このことは、北条氏がかなり早い段階から比企氏打倒の計画を練っていたことを示すものである。

一方、肝心の中野氏と北条氏の関係だが、『吾妻鏡』建仁元年九月廿二日、同十月二日条には次のような興味深い記事がある。それは頼家が蹴鞠にふけて政務を怠るので、北条泰時が密々能成と会って諫言するように申し入れたところ、能成もその通りだと納得して諫言したが、かえって頼家の不興を蒙ったというのである。頼家の専恣な行動には、能成自身も手を焼いていたことを示唆する逸話であり、北条氏側と気脈を通じていたとしても、さして異とするには当たらない状況に置かれていたことは確かであろう。

## △翻刻▽

『信濃史料』第三卷五〇〇頁、『新編 信濃史料叢書』第三卷四頁、  
『鎌倉遺文』一三七八号

## (7) 関東下知状(写か)

信濃國春近領志久見郷地頭職事

藤原能成

右件人、如<sub>レ</sub>本可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>彼職、抑依<sub>二</sub>能員非法、難<sub>二</sub>安堵<sub>一</sub>之由依<sub>二</sub>聞食、  
於<sub>二</sub>得分<sub>一</sub>者所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>免也、然者成<sub>二</sub>安堵思、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>官仕忠<sub>一</sub>之状、依<sub>二</sub>  
鎌倉仰<sub>一</sub>、下知如<sub>レ</sub>件

建仁三年九月廿三日

遠江守平

(花押影か)

(付箋)  
「とうたうみのかうのと、御下文」  
みくうし御めんの御はん」

## △釈文▽

信濃國春近領志久見郷地頭職の事

藤原能成

右件の人、本の如く彼の職たるべし、そもそも能員の非法に依り、  
安堵しがたきの由きこしめすに依って、得分においては免ぜらるる  
所なり、然れば安堵の思いを成し、官仕の忠を致すべきの状、鎌倉  
(殿)の仰せに依って、下知件の如し、

建仁三年九月廿三日

遠江守平 (花押)

## △語註▽

春近領 これについては古くから郷土史家の間でも論争があつて、  
これまでさまざまな説明が唱えられてきたが、近年稲垣泰彦氏に  
よる研究(「春近領について」『一志茂樹博士喜寿記念論集』所載、  
のち同氏著『日本中世社会史論』所収)によつて大きく前進し、  
ほぼ氏の説が定説化している。それによれば、まず「春近」は仮  
名であり、平安末期のある時期に禁裏御服料を調達するために、  
一定の国々から国衙領や在庁名を「便補の郷」として充てること  
によつて成立した大所領(公領)、というものである。鎌倉時代  
に關東御領となつていたとの指摘はなお検討の余地があるような  
気もするが、そのほかの点はほぼ首肯される見解であらう。信濃  
以外で春近領が確認されるのは、いまのところ越前・近江・美濃  
・上野の四ヶ国で、東山道に集中していたのが特徴である。また、  
信濃の春近領は①近府春近②伊那春近③奥春近の三グループから  
成つていたことが、市河文書の正安二年十一月八日關東下知状に  
よつて知られる。①には伊那郡の小井・二吉・赤須・名子・飯島  
・片切・田島の各郷、②には筑摩郡の塩尻・小池・島立・二子の  
各郷と新村南郷、および安曇郡の大妻南方、③には高井郡の志久  
見郷のほか埴科郡の舟山郷などが含まれていたことが確認される。  
能員非法 いわゆる比企氏事件で、能成が表向きは比企氏の側で行  
動したことを指す。

聞食 きこしめす。「聞こし召す」は通例「聞く」「聞き入れる」

「飲む」「食う」「治める」「行なう」などの尊敬語。ここでは鎌倉

殿（將軍）に対して用いられている。「難<sub>ニ</sub>安堵<sub>ニ</sub>之由依<sub>ニ</sub>聞召<sub>ニ</sub>」で「安堵できないとお気持ちなので」といったほどの意か。

得分 原義は財産譲渡などが行なわれた際の「自分の取り分」のことだが、ここでは本来の地頭職に見合うだけの収入の意か。本文書を由緒正しい文書とすれば、比企氏事件に連坐した能成に対して、本来の地頭としての権限をそのまま安堵することはできないが、地頭職に伴なう収入だけは取得することを許すので、安堵されたのと同じ思いで、今後とも忠義を尽せというのが文意だろう。鎌倉仰 本来ならば「鎌倉殿仰」とあるべきところ。形式的な文言とは言え、このような脱落は通常では考えがたいので、やはり本文書は少なくとも正文でないことは確かであろう。鎌倉殿とは幕府の將軍（ここでは建仁三年九月七日に就任した源実朝）に対する敬称。

みくうし御めん 御公事御免。本文の「於<sub>ニ</sub>得分<sub>ニ</sub>者所<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>免也」に該当する表現。すなわち、付箋の筆者は「得分」を農民が領主に負担する雑公事（つまり領主の徴収できる雑税）のことと解しているが、あるいはこれが実態に近いものであったかもしれない。

△翻刻▽

『信濃史料』第三卷五〇一～二頁、『新編信濃史料叢書』第三卷四〇五頁、『鎌倉遺文』一三八一号、

#### ※付記

石川県立図書館所蔵『雑録追加』卷七所収治承五年十一月二十四日木曾義仲下文写の写真掲載については同館長盛田義弘氏の許可を得た。閲覧に際して多大の御尽力をいただいた上に、終始有益な御教示を賜った同館『加能史料』編さん室の室山孝氏に厚く御礼申し上げる

また、本文書の閲覧、写真撮影は、今年七月、『長野市誌』編さんに関わる史料採訪の一環として実施したものであるが、この採訪につき格別の御配慮をいただいた長野市誌編さん室長の宮下八紘氏ほか編さん室の皆さん、および原始古代中世部会長井原今朝男氏にも衷心より感謝したい。

（一九九二年八月二八日 受理）